

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：田中 明人（たなか あきと）
- (2) 年 齢：43 歳
- (3) 参加事業： 第 26 回「東南アジア青年の船」事業（1999 年）
第 30 回「東南アジア青年の船」事業（2003 年、管理部員）
第 37 回「東南アジア青年の船」事業
（2010 年、事後活動組織日本代表者）
- (4) 職 業： 株式会社イームインターナショナル（代表取締役）
JTA TRADING CO., LTD.（CEO：最高経営責任者）
経済産業省「新輸出大国コンソーシアム事業」元専門家
農林水産省「輸出プロモーター事業」元専門家



■ 応募のきっかけ

高校時代にアメリカに留学し、自分の視野の狭さと偏った考え方をしていることを実感しました。大学生になって東南アジアを身近に感じる機会があり、外国のことをより知りたいと思っていました。「東南アジア青年の船」事業に参加する前に同事業の日本青年向けプログラムである「アジア青年の集い」に実行委員メンバーとして参加したことがきっかけで、乗船したい気持ちが高まりました。本プログラムに参加することで、東南アジアの青年との交流を通し、東南アジアに友達を作りたいという気持ちが強くなりました。同世代の青年たちがどのようなことを考えているのかも漠然と興味がありました。

私は自分が LGBTQ であることを中学生の時に確信したものの、そのことを大学 2 年時まで一人で抱えながら生きてきました。大学 2 年時の後半、残りの大学生活と社会に出てからの生き方について深く悩んでおり、何か変わる大きなきっかけが欲しい時期でもありました。このような生きることにおいて不安定な気持ちの中で事業に参加しました。

■ 事業参加経験がキャリアパスに特にプラスになったこと

LGBTQ として堂々と生きる参加青年を見て、**私も自分らしく生きていいんだと自信を持つことができました。**

また、プログラム中のディスカッションとホームステイが私のキャリアパスに特に影響を与えたと感じています。ディスカッションでは、**普段の交流では得られない考え方や価値観**を外国青年から学びました。大切なのは、語学力だけではないということです。**話す力以上に聞く力を身に付ける必要性**を学びました。このことは現在行っているビジネス上での商談に活かされています。コミュニケーション力の向上を意識していく上で、**相手を尊重することの大切さ**を学ぶこともできました。

ホームステイでは、**日本人としての自覚**を持つ場面に遭遇しました。日本という国を周りの東南アジアの人たちがどういった視点で見えてきたかということも学びました。ホームステイ先で、**日本人として見られている**ということを実感する場面がありました。フィリピンでホームステイした時、ホストファミリーに「私たちは戦争が原因で日本が嫌いなの。でも、あなたを通して日本人に対する価値観を変えられるかもしれないと思って、今回あえて日本人を引き受けることにしたの」と言われたのです。**私を通して日本人全体の印象が形作られていく**ということを認識し、自分の発言や態度に**日本人としての責任感**さえ感じるようになりました。



マレーシアにてホストファザーと（本人左）

私自身が他人の何気ない一言で傷ついてきたように、私自身も悪気の無い一言で周りを傷つけてきたのかもしれないことに気付き、相手はどう思うのかを考えて、より慎重に発言するようになりました。

また、船内での共同生活は私にとって大きな影響がありました。共同生活をする中で相手を知ることができ、友情が芽生え、信頼関係が築けたと思います。今、東南アジア関連のニュースを見ると、遠い国の話ではなく、大切な仲間達が大量にいる国のニュースだと見入ってしまう自分がいます。

日本嫌いであったホストファミリーとはどのような関係性を築くことができましたか。

今でもフィリピンのホームステイのことをはっきり覚えています。私が参加した年は6か国訪問しましたが、フィリピンが最後のホームステイでした。それまでのホームステイは、ホストファミリーが笑顔で出迎えてくれて、笑顔で終わっていました。しかし、フィリピンのホームステイは違っていました。

最初の晩に皆でフィリピン料理をいただく台所で手伝いをしていました。夜も遅い時間でした。ずっと笑顔だったホストマザーが、ふとした時に「実はね・・・」と話し始めたのです。「こんな言い方をしたら気を悪くすると思うけど、私たち家族は日本人のことが嫌いだったの」英語で「hate（大嫌い）」という単語を使っていました。私は非常に驚きました。最初、頭に浮かんだのが、「じゃあ、なぜ日本人を引き受けたのか」という疑問でした。当時、ホストファミリーは受け入れる青年の国籍を選べたからです。「何か嫌みを言うために敢えて受け入れたんだろうか」という疑問も浮かんできました。でも、ホストファミリーはそういう感じではありませんでした。ホストマザーは歴史的な問題が理由だと言いました。「私はいちいちあなたに歴史問題について話すつもりはない。あなたは大学生だからそのことは知っているわよね？」これを聞いて私はまず素直にお詫びしました。歴史の問題に関して軽はずみな発言はできないと思っていたからです。それから、過去の事実は変えられないけれど、ホストマザーが言ったことは受けとめたいと思っていること、今後、フィリピンと日本が仲良くなっていくきっかけに自分になりたいこと、「東南アジア青年の船」事業で抱いたフィリピンに対する良い印象等について話しました。そして、言葉を選びながら、できるだけ丁寧に、なぜ、私を受け入れることを希望してくださったのかと尋ねてみました。「今回あなたを受け入れることで、私たちも、憎しみや怒りの気持ちをなくしたいという思いがあったの」との返答でした。この言葉を聞いた時、このホストファミリーは、私という人間を通じて、日本に対するイメージを変えようとしているのだと悟りました。ホストマザーはこのことに一切触れませんでした。でも、ホストマザーも同じ思いだったはずですが、それでも、ずっと笑顔で接してくれました。それは、純粋に私が楽しく過ごせるように気を遣ってくれていたのと、日本人というものを、私を通して観察するためだったのだと思います。

あの時、20歳の自分が感じたことを正直に話して、ホストファミリーと向き合えたことは本当によかったと思っています。日本という国が過去に行ったことに対してはマイナスの意見が多かったのですが、私に関しては、ありのままを受け入れてくれました。「あなたの考えも間違いじゃないから」と言って否定することはありませんでした。船の中で行われるプログラムでも、参加青年同士が、お互いをありのまま受け入れようということを何度も話し合っていました。これまで生きてきて、受け入れてもらえなかったというコンプレックスがあった私にとって大きな学びでした。最後のホームステイ先のフィリピンで、私も相手のありのままを受け入れるようにしようと努めたところ、ホストファミリーと分かり合えたのです。結局、このホストファミリーとは、最後に、涙、涙のお別れをすることになりました。

■ 内閣府の事業でしか得られない経験

国家プロジェクトに参加するわけですから、日本人であるという自覚が促されます。民間企業に勤務しては会えないような政府機関の方と交流ができます。各国の選考において、政府が関与していることもあり、**国から選ばれる、各国の未来を担っていくような代表青年同士で交流できる貴重な機会**と言えるでしょう。

「国の代表青年同士で交流できる楽しみ」とは具体的にどんなことでしたか。

東南アジアから来た代表青年たちは、非常にコミュニケーション力が高く、聞き上手だったという印象があります。私は高校時代にアメリカに留学していたので、英語で言いたいことはある程度伝えられると思っていました。しかし、東南アジアの代表青年たちから、伝えることよりも、聞くことの重要性を学びました。相手のことを思いながら、話すタイミングや間の取り方とかといった真摯に聞く姿勢です。人間として魅力があるのは、話す力と聞く力の両方を兼ね備えている人だと感じました。もちろん、語学以上に、笑顔の大切さを学びました。本プログラムの参加者の中には英語が得意ではない参加青年もいました。彼らは自国青年同士で集まってよくヌードルパーティーをやっていて、私にも「おいで！」と言って誘ってくれるのです。あの時のあの青年たちの笑顔、みんなが自分を受け入れてくれる感じ、安心できる雰囲気や人を和ませる力というのは、語学力だけではないのだなと感じました。こうしたコミュニケーション力の高い各国の代表青年と交流できることは本当に有意義な体験でした。



にっぽん丸のデッキにてインドネシアの青年と
(本人右)

参加青年の間で意見が衝突することがありましたか。

ありました。それはみんな心を開いているからこそ、内に秘めているものを出し合っていたのだと思います。

衝突ではないのですが、キャビンメイト同士で考え方が異なり、徹底的に話し合ったことがありました。3人で一つのキャビンで生活していた時、ある国の青年が毎朝5時頃から部屋でお祈りをするのです。1日5回お祈りする。しかも声を出してお祈りしないといけない。最初、私はお祈りの習慣のことをよく知らず、朝はゆっくり寝られると思っていましたので、彼にそのことを言ったのです。ただ、私の言い方がよくなかったのか、うまく伝わりませんでした。「アキトはお祈りすることも否定するのか」と言われてしまったのです。そこで助けてくれたのが、フィリピンの青年でした。彼は話し合いをうまくリードしてくれて「アキトは悪気があって言ったのじゃないし、宗教の批判をしたのではないと思うよ」と言ってくれました。そして、みんなでルールを決めようと提案してくれました。その頃の私にはルールを決めるという価値観がありませんでした。でも、彼のおかげで分かり合えるまでしっかり話ぐできました。意見が割れても、納得するまで話し合っ、ルールを決めるというのは非常に大切だと思いました。

内閣府の交流事業と民間の交流事業との決定的な違いは何だと思いますか。

日本という国を背負って参加するので、日本人であることをあらためて認識させられました。国の代表同士が交流するというのは「東南アジア青年の船」事業が私にとって初めてでしたので、日本人であることをもっともっと突き詰めて考えようと思うきっかけになりました。この点は、それまで経験してきた民間のプログラムやボランティア活動とは決定的に異なる点でした。

■ 事業参加によって変化した価値観

プライベート面では、身近な LGBTQ 仲間が4名立て続けに自ら命を落としたこともあり、「僕は生きていいのか？」とすら考えていましたが、事業中に「同じ LGBTQ として堂々と生きる参加青年を見て、「僕も自分らしく生きていいんだ」と少し自信を持つことができるようになったのが大きな変化です。その結果、全国から LGBTQ 仲間150名ほど募って、イベントを年に3回主催するようになりました。2019年に台湾で主催した日台合同 LGBTQ イベントでは、1200人の日台 LGBTQ 仲間が参加してくれました。

さらに、相手に求めることを控えるようになりました。求めすぎて、疲れていた時期もありましたが、今は少し違います。誰もがありのままの自分に自信を持って生きていけること、お互いが尊重し合える社会になっていくことを願っています。その人がその人らしく生きていける、そんな生きやすい日本社会、いや、世界社会になれば嬉しい限りです。自分自身がその活動の一助けになるのであれば、積極的に協力していきたいと思っています。

いまだに、LGBTQ であることを理由に迫害される社会があることも現実です。ある国の国家公務員の友人は、怯えながら生きているのが現実です。そういう社会があるのも事実で、私一人で変えられるとは思いませんが、何かしらのメッセージを伝えられえる日がくればと願っています。

ビジネスで面では、「東南アジア青年の船」事業に参加した外国青年とビジネスを立ち上げました。それぞれの国で会社を設立し、私の立ち上げた日本の会社だけでも多い年で年商 5 億円近くを売り上げる会社にまで成長することができました。これからも**日本と東南アジア、世界の架け橋となるグローバル企業**を目指していきたいと思っています。

参加青年の中には LGBTQ の方が多くいらしたのですか。

いました。私と同じように葛藤を抱えている参加青年もいました。乗船当時、私自身の中では、自分がそういう人間だということを知っていましたが、公にはしていませんでした。反対にオープンにしている参加青年も数多くいました。私はそれがカルチャーショックで、非常に驚きました。高校でアメリカに留学した時に LGBTQ の人たちと出逢う機会も多く、堂々と生きることができて羨ましいな、という漠然とした思いはありましたが、自分はどうやって生きていけばいいのかまでは分かりませんでした。「東南アジア青年の船」に乗って初めて、私も生きていいんだと思えるようになりました。それは同じような LGBTQ の仲間に出会ったからだと思います。私がカミングアウトし始めるのが、船に乗った翌年の大学 4 年生からなのですが、私がカミングアウトしたことで、1999 年の船の仲間から、実は自分もそうだったという話を聞くようになり、LGBTQ ネットワークもできています。ただし、いまだに認められていない国があるのも現実であり、「僕は望まない結婚もしたし、誰にも言えない。だから、アキトが『東南アジア青年の船』で同じような仲間を見つけて、少しでも生きる希望が持てて、少しでも自分らしく生きられるのだったら、すごく羨ましいし、その状況に感謝しないといけないよ」と言われています。

今回のこのインタビューを受けるにあたり、両親や兄に相談し、私の会社の社員全員にも話しました。私が LGBTQ であることで、社員が嫌な思いをしたりしないかと非常に気になっていたからです。「公表することが社長にとって自分らしい生き方だと思えるのなら」と社員が全員一致で賛同してくれました。父は「自分に自信を持って生きていけるのであれば、何も言うことはない。誰かに迷惑をかけているわけではないし、周りの目は気にならない」と言ってくれました。母は「明人が幸せで楽しい人生をおくってくれたら、それだけで満足。生き生きしていることがうれしい」、兄は「(周りの目は) 全然気にならない。いいんじゃない」というメッセージをくれました。



両親と共に (本人左端)

私が不安だったのは、このインタビューの内容がどこかで両親の近所の人たちの目にとまって、両親の耳にそれが入ったりしたら・・・ということでした。私が両親にカミングアウトしたのは 2008 年のことです。父からは「それは病気なのかな。治るから大丈夫だ」と言われました。母からは「(LGBTQ として) 産んでごめんね」と言われました。両親にカミングアウトする 2 か月前に、兄には話してありました。両親の反応について兄に報告したら、兄は私の知らない間に「アイツはアイツでもものすごく苦しんで生きてきたのに、なんでそんな言い方しかできないのか」と両親に話したそうなんです。このインタビュー内容を知った人が両親に向かって「お宅の息子さん、普通じゃなくてかわいそうね」などと言ったりしたら・・・。「産んでごめんね」と

言わざるを得なかった、あの時のような気持ちを母が味わうことになるとしたら……。心無い言葉をかける人たちがいたら、本当に申し訳ないと思ったので、両親に相談したのですが、カミングアウトした時とは全く別の反応が返ってきました。そこで、今回のインタビューを契機に私が LGBTQ を公表することで、一人でも救われたり前向きに生きていけたりする人が増えるのなら素直に嬉しい、と考えました。実際、今でも自ら命を絶ってしまう人がいます。今でこそ、社会の風潮も変わってきましたが、昔は、気持ち悪いから仲間に入らないでほしい、とか、友達として付き合っていくことは考え直させてほしい、と言われたこともありました。それはその人の考え方だから仕方ないと思っています。

今、強く生きていられるのは、「東南アジア青年の船」に乗って、相手だけでなく、自分自身のありのままを受け入れることがいかに大切かということを非常に多くの場面で学べたからです。このことは今、プライベートでも仕事でも生きています。相手を否定することはビジネスのチャンスも潰してしまう。いったん、相手の話を受け入れて、その上で、自分の考えや、自分の会社にとって有益な情報を小出しにしていくことが大切です。こうしたことの原点が「東南アジア青年の船」だと思っています。

どんなきっかけで「株式会社イームインターナショナル」を設立されたのですか。

小さいころから好奇心が旺盛な性格であり、また両親の理解があったこともあって、いろいろなことに挑戦させてもらえる環境で育ちました。会社に属し組織の中の一員としてできることと、自分で会社を立ち上げてやっていくこととは、できることの領域が異なると考えていました。自分の想いを形にしたいという強い願望がありました。「失敗して責任を取るのは自分」というチャレンジングな世界に飛び込みたいという気持ちが、長年のサラリーマン生活を経て段々と芽生えるようになりました。

タイのバンコック銀行で法人融資を担当していました。融資担当なので、経営者にお会いする機会が多く、いろいろなお話を聞き、ビジネスって面白そうだなと思うようになりました。経営の醍醐味などもうかがって、羨ましいと思うようになったのも起業するきっかけです。もともと何かを形にしたいという願望があったからかもしれません。起業に踏み切ったのは、法人融資の業務に携わって、決算書から企業分析をするスキルを身に付けたからです。決算書のこの点に気がつけば会社は倒産しないですむとか、この分野に力を入れれば伸びるだろうといったことが分かったのが大きかったと思います。

そもそも私がバンコック銀行に職を得たのも、タイ青年からのお声かけがきっかけでした。「アジア青年の集い」の時に知り合ったタイの既参加青年がバンコック銀行の日本支店で働いていて、バンコック銀行で日本人を1年間採用したがついてという話を教えてくれました。

銀行を辞めた後は、タイ大使館で勤務したのですが、ここでも日本やタイの経営者とお会いする機会があり、自然と経営の世界に引き込まれていったような気がしています。

8年前に日本とタイで同時に会社を立ち上げたのですが、大学時代にタイ語を勉強したこともあって、タイ語の社名にしました。「株式会社のイームインターナショナル」の「イーム」とはタイ語で「笑顔」という意味なんです。「イーム」と長めに発音して、やわらかい響きになるようにしました。

「東南アジア青年の船」事業のおかげで、様々なつながりがありました。ご縁を感じています。

■ 船を用いた国際交流の意義

やはり何と言っても共同生活です。私は、船内での共同生活を通して、言葉では表せない絆と信頼関係を築くことができました。クラブ活動、現地訪問、ホームステイ等を通して感じたことについて、ディスカッションして考えを共有することは、オンラインでは限界があります。また、ふとした何気ない瞬間に話を聞いてくれる仲間が傍にいて、悩みや考えを共有することで信頼関係が生まれます。信頼関係を築くのは、やはり、対面に限ります。1回60分のオンライン交流を10回行うよりも、1回60分の対面での交流を選択する人のほうが多いと思います。

どのような絆と信頼関係を構築されましたか。

見えない絆や安心感です。今、内閣府の船事業に参加した人たちとビジネスをしているのですが、SSEAYP というキーワードで、お互い安心できているように思います。我々は SSEAYP SPIRITS と呼んでいるのですが、「東南アジア青年の船」事業に参加したというだけで、参加年度が違っていても、**一気に信頼感が湧いてきます**。事業参加当時、何かあるとよく「We have the same SSEAYP spirits, right?」と仰っていました。お互いに信頼関係がないと、大きな金額の取引をするときに不安になるものですが、SSEAYP 関係者であれば信頼できます。あの同じプログラムを体験し、あの共同生活を送った人なのです。「東南アジア青年の船」事業に参加している外国青年はエリート層ですし、自分の考えをしっかりと持った人たちです。言葉では表せない安心感や絆を得ていると思います。



「東南アジア青年の船」事業最終日に空港にて
(本人左から3人目)

■ 事後活動

母校での講演会等で、「東南アジア青年の船」事業の経験を話しています。本事業を通して感じたことは、語学ができて、国際社会では通用しづらいということです。もちろん語学力がないとビジネスの世界では通用しません。でも、語学力と同じくらいコミュニケーション力が大切だということを伝えていきます。また、自分らしく生きることのすばらしさについても語っています。私は様々な体験や人との出会いによって自分に自信を持つことができるようになり、笑顔で生きていきたいと思うようになったことも伝えていきます。自分が笑顔であれば、周りの人も笑顔にできます。事業参加によって自分も生きていいんだと確信できました。社会的弱者と言われることに違和感がありましたが、社会的弱者としての立場を恥じることなく、精一杯生きてしっかり自分らしく人生を謳歌しようと思うようになりました。亡くなった仲間たちの分まで、毎日を楽しく、自分らしく、しっかり生きていきたいと思っています。いつ何が起きるか分からない、たった一度の人生を、どうせなら明るく笑って過ごしていきたいという点も積極的に伝えていきたい。まずは自分がハッピーであれば、周りもハッピーになっていける。そう信じています。生きていて価値のない人間はいないのです。誰もが自分らしく堂々と生きてほしい。その社会を目指して、私自身にできることはこれからも行動に移していきます。

ビジネス面では、人のために、企業のために、そして社会のために、お客様に喜んでいただくことを第一に考え、社会に貢献し続けるグローバルな会社を目指し、経営者として邁進中です。地方創生事業や国家プロジェクトにも積極的に関わり、全国での講演会活動にも従事しています。複数地域の社会福祉施設と連携し、業務を積極的に外部委託しています。求める業務内容を求められる形、求められる金額で、なるべくお互いにとって Win×Win の関係で委託するように心がけています。また、「あなたの夢を応援させてください」プロジェクトを立ち上げ、全国の様々な夢を応援しているところです。さらに、全国の在日外国人を応援する「イームフレンズプロジェクト」では、在日外国人同士でリアルな情報交換、友達づくりができるイベントを開催しています。

日々入ってくる様々な情報は多岐にわたります。こうしたい、ああしたい、という気持ちにかき立てられることが多々ありますが、大切なことは、今の自分の立ち位置で何ができるのかを自分の中に落とし込んで考え、しっかり行動に移していきたいと思っています。必要とされる場所に自分の力を惜しみなく発揮していきたいです。「東南アジア青年の船」事業に参加後、すべての参加国を訪問しました。どの国でも出迎えてくれる仲間がいるのは非常に心強く、このプログラムから得られた恩恵だと感じています。

田中明人氏プロフィール

高校時代にアメリカに交換留学、大学時代にタイ語を独学で勉強し、現在は 3 か国語でビジネスを展開。大学卒業後は銀行マン、大使館職員としての経歴を持ち、2013 年に独立、起業。総合貿易商社を日本とタイの 2 か国で同時に設立。「売り手」と「買い手」の二つの視点を養う。現在は、日本国内だけでなく、東南アジア 10 か国を軸に 21 か国に対して 64 社の有力バイヤーとのコンテナレベルでの取引を行っている。大学時代に参加した「東南アジア青年の船」事業を通して、グローバルに活躍する東南アジアの経営者仲間とのネットワークを今のビジネスの場にも活かしている。会社経営者として活躍する一方、日本政府の国家プロジェクトや地方自治体の海外展開プロジェクトにも数多く関わっており、また、全国各地での講演活動にも注力している。また、日本から世界へと羽ばたこうとする企業を様々な角度から支援している。